発問例

・「導入の問い」のねらい

自分の思う「正しさ」に疑いを持ったことがありますか。

（ねらい）高校に入学したことを機に、中学時代までとは大きく価値観が異なる集団や文化に出会うことも多いかと思われる。中学校までは、保護者や教師などの価値判断をそのまま受け容れることもあっただろうし、部活動や塾の仲間とだけで醸成された価値基準もあったのではないか。しかしそうした「正しさ」を、環境が大きく変わることもある高校一年生の感覚で問い直してみることも大切であるし、また、その根拠についてじっくり考えることがあってもよい。

●一八二ページ

問 **冒頭の二文には、この小説を読ませるうえでどのような効果があるか。**

答 時間、場所、人物の状況が提示され、以下の展開への興味が喚起される効果。「暮れ方」「雨やみ」の語が沈んだ雰囲気の印象を与え、「羅生門」「下人」の語が過去の時代を感じさせる。

補 京を舞台とする歴史小説、「日暮れ」から始まる物語、「雨やみ」を待つという受動的な姿勢などを押さえる。動ではなく静の傾きがある。

問 **「きりぎりすが一匹止まっている。」（3行目）には、情景描写としてどのような効果があるか。**

答 ぽつんと頼りなげなあり方により、①下人の孤独を印象づけ、②寂寥感を深めたり、③季節感や④色彩感などを表す効果。

補 場の寂しさや命のはかなさを一匹の虫によって象徴的に描写している点を把握させる。

問 **「この男のほかには誰もいない。」（5行目）における、係助詞「は」の働きは何か。**

答 取り立てて強調する働き。この男だけがいることを際立たせる。

補 「この男のほかに誰もいない。」（2行目）

問 **作者が「旧記」（7行目）に言及したのはなぜか。**

答 史資料を用いていることを明示して、歴史小説としての信頼度を高めるため。

補 語り手は物語の中の現在から離れ、現実の歴史上の現在の視点で、物語の外から、過去を確かめている。このことは語り手が「作者」自身であることを指示する。

問 **「仏像や仏具を打ち砕いて、……」（8行目）とあるが、このような事態は、端的にどのような状況を示しているか。**

答 生活の困窮が、人々の信仰心すら失わせるほどの、人心の荒廃をもたらしている状況。

補 単に生存困難な状況というではなく、人々の心がすさみきっている点を言う必要がある。

●一八三ページ

問 **「足踏みをしない」（1行目）とは、どのような様子か。**

答 足を踏み入れない、近づかない様子。

補 通常の用法との違いに注意する。

問 **「鴉」（3行目）の群れが飛ぶさまは、どのような印象をもたらしているか。**

答 血をイメージさせる夕焼けの赤と鴉の黒との対照による不吉さ（死）、気味悪さ。

補 視覚的な鮮やかさが一層不安をあおっている。

問 **「にきび」（15行目）の叙述を、この後の部分から三箇所抜き出しなさい。**

答 ①短いひげの中に、赤くうみを持ったにきびのある頬である。②もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら③不意に右の手をにきびから離して

問 **「にきび」（15行目）は、どのようなことを物語っているか。**

答 下人が若く、それゆえの優柔不断さと危うい強さを持っていること。

補「にきび」は下人を特徴づける焦点化された一点。以下、作品の要所で、下人の若さそれ自体が持つ悩み多い優柔不断さと、決断したら猪突猛進する強さ、感情の揺れなどが、この一点の印象に結びつけられる。

●一八四ページ

問**◉「作者は…書いた。」（1行目）の一文には、どのような効果があるか。**

答読者が本文から読み取ってきた平安末期の「下人」の状況が、「作者」が「旧記」などを参考にして執筆しつつあるフィクションであることに注意を向けさせる。

補膨大な資料によって立ち上げられている小説世界がすべて書き手である「作者」によって操作可能なフィクションであることを早い段階で明示することで、その創作現場を垣間見ながら下人の言動も追っていくというメタフィクション構造が成立している。

問**「衰微の小さな余波にほかならない。」（5行目）とは、どのようなことか。**

答都の荒廃という時代状況の影響が下人に否応なく及んできたということ。

補個人の力ではどうしようもない事態であることを捉える。

問**「……というほうが、適当である。」（7行目）というのは、なぜか。**

答下人の状況を正確に伝えているから。

補単なる雨宿りでないことが要点。

問**「この平安朝の下人の Sentimentalisme」（8行目）という表現には、どのような効果があるか。**

答下人を、作品の舞台とは異質の、近代的な人間心理を備えた人物として印象づける効果。

補フランス語の原語表記が読者に、時代と状況のミスマッチを感じさせる異化作用として働いている。知的スノビズム（俗物主義）と反発する向きもあろう。

問**「どうにもならないこと」（10行目）とは、どのようなことを表しているか。**

答「明日の暮らし」のめどが全く立たないこと。

補生きるための方途がなく、追い詰められている状況の確認。

問**「雨は……」（13行目）「夕闇は……」（13行目）という描写は単なる情景描写にとどまらない効果を持つが、どのような効果か。**

答下人の重苦しい心の心象風景となる効果。

補追い詰められた心の不安を伝える描写である。

問**◉「手段を選んでいる暇はない。」（16行目）とは、「下人」のどのような状況を述べているか。**

答生き延びるためには、善悪の判断を超えた現実的行動を選択せざるをえないところまで追い込まれている状況。

補「手段を選ばない」とは、目的のためにはどんな手段でも実行すること。具体的には「盗人」にでも何にでもなること。瀬戸際にまで追い詰められた心理にあることが分かる。

●一八五ページ

問**◉「この局所」（5行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答手段を選ばないとすれば、盗人になるよりほかにしかたがないということ。

補考えの筋をたどって、「手段を選んでいる暇はない」から「選ばないとすれば」という条件の部分までは、考えが絞られてきたので、「局所」の語を用いたのである。限られているのであって、全体を見渡しての判断とは受け取りづらい表現である。受けている部分はダッシュまでを含むので注意したい。

問**「あげく」（4行目）「結局」（6行目）の語源を答えなさい。**

答「あげく」は、連歌・連句（短歌の五七五の長句〔上の句〕と七七の短句〔下の句〕を数人がつないで詠み合う形式の文芸）の最終句。

「揚げ句」とも言い、初句の「発句」と対応する呼び方。「結局」は囲碁を打ち終えること。

補 両者ともゲームの終わりを意味する用語から転じて、最後、終末の意を示す。

問 **「すれば」（5行目）とあるが、「　」つきで述べているのはなぜか。**

答 現段階では仮定の段階を出ないということを強調するため。

補 論理の必然として逢着した「局所」ではあるが、心にはその後を肯定する勇気が生まれない事態の確認。

問 **『すれば』の片をつける」（7行目）とは、どのようにすることか。**

答 「盗人になる」ことを肯定すること。

問 **「勇気が出ずにいた」（10行目）のは、どういう気持ちの表れか。**

答 盗人になることをためらう気持ち。

補 なぜ逡巡するかについてまで含めた解答もあり得るが、逡巡の理由を限定することは困難である。ただ、さまざまな理由をあげることは読みを広げ深めることになろう。

問 **「大きなくさめ」（11行目）は下人のどのような状況を表しているか。**

答 吹きさらしの石段に座り続けて、雨の夜の寒さが身に迫って来た状況。

補 晩秋の雨の夜、座って思案に暮れていた間の時間の経過も読み取れる。

問 **「大儀そうに立ち上がった」（11行目）のはなぜか。**

答 一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそうと思ったから。

問 **「きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。」（14行目）という記述には、どのような効果があるか。**

答 夜の深まりという時間的経過と一層の寂しさを感じさせる効果。

補 時間の経過を示し、寂寥感、孤独感をさらに増している。

●一八六ページ

問 **「どうせ死人ばかりである。」（4行目）というのは、下人のどのような気持ちの表れか。**

答 「人目にかかる」よりは、死人と一緒にいるほうがましだ、面倒がなく気楽だ、という気持ち。

補 「盗人になる」ことを考えていたことの負い目、心身の疲労で早く休みたい気持ちが、人に煩わされたくない思いを生んでいる。

問 **「聖柄の太刀」（4行目）は、下人にどのような印象を加えているか。**

答 力強く、精悍な印象。

補 ここに至って初めて、太刀を帯びた若い男というイメージが浮かび上がる。

問 **◉「一人の男」（7行目）とは、誰か。また、このような表現をしたのは、なぜか。**

答 「一人の男」とは下人を指し、①新たな場面転換を印象づけると同時に、②緊張感（サスペンス的感覚）を与えるためにこのような表現をした。

補 第三者的に客観化した視角で下人を描くことによって、一瞬、第二の人物の新登場であるかの錯覚を与え、緊張感を生んでいる。改めて下人に着目させる手法である。

●一八七ページ

問 **「にきび」（1行目）のここでの効果は何か。**

答 男が下人であることを指示する効果。

補 再び「下人」と呼ぶための仲立ちの役割。

問 **◉「それ」（4行目）は、どのようなことを指しているか。**

答 誰か火をとぼして、しかもその火をそこここと、動かしているらしいこと。

補 直前の「その濁った、黄色い光が、……映ったので」と理由の提示があるのがヒントとなる。

問 **「この雨の夜に、この羅生門の上で」（5行目）とは、どのような状況を表しているか。**

答 死体置き場となった羅生門が、常人の近づくはずのない異常で不気味極まる場所となっている状況。

補 羅生門の上が、下人に日常世界と隔絶した空間として把握されていることを見る。

問 **火を「とぼす」（2行目）「ともす」（5行目）の二つの語と同様の例をあげなさい。**

答 「さびしい」「さみしい」、「けぶり」「けむり」、「とぶらい」「とむらい」など。

補 バ行とマ行の相通現象。

問 **「やもりのように足音を盗んで」（6行目）とは、どのような様子を表しているか。**

答 気配を消して足音を立てずに闇をはう様子。

補 「やもり」の比喩と「足音を盗む」の意味に注意する。

●一八八ページ

問 **◉「ある強い感情」（2行目）とは、具体的にはどのようなことか。**

答 「六分の恐怖と四分の好奇心」（8行目）。

補 死骸の中にうずくまっている人間を見たという、予想外の異常な事態に対する恐ろしさ（頭身の毛も太る）と、その不思議さへの衝撃的な驚きである。

問 **「檜皮色の着物を着た」（4行目）「背の低い」「痩せた」「白髪頭の」「猿のような」（5行目）と修飾語を畳みかける表現は、下人のどのような様子を表しているか。**

答 一気に老婆に関心が集中しながら、衝撃のために次々に断片的に特徴をつかむことしかできない様子。

補 下人が恐怖と好奇心に駆られて老婆の姿を何とか確かめようとする様子である。

問 **「頭身の毛も太る」（9行目）とは、どのようなことか。**

答 身の毛がよだつこと。異常な恐ろしさの形容。

問 **「恐怖が少しずつ消えていった。」（13行目）のはなぜか。**

答 刺激に慣れるに従って恐怖心から髪の毛の抜け方に関心（好奇心）が移っていったから。

補 16行目の一文に着目する。

問 **◉「激しい憎悪」（14行目）とは、どのようなものか。**

答 死人の髪の毛を抜くという行為に対する衝動的、感情的、生理的な拒絶反応から生まれる怒り。

補 「反感」（16行目）の語からも、この憎悪が「合理的」なものではなく、感情的、反射的なものであることが分かる。

問 **作者は、「語弊がある」（16行目）でどのようなことを述べようとしているか。**

答 下人が抱いた感情は「老婆に対する激しい憎悪」ではなく、むしろ「あらゆる悪に対する反感」であるということ。

問 **「一分ごとに」（16行目）という表現からどのようなことが読み取れるか。**

答 数分間見つめていて、その過程で「憎悪」が次第に増していくという心の変化が起こったこと。

補 「六分の恐怖と四分の好奇心」の「分」と比べて、「分」の意味をはっきりさせる。

●一八九ページ

問 **「合理的には、……知らなかった。」（6行目）とは、どのようなことか。**

答 老婆の髪の毛を抜く行為が不可解なるがゆえに、論理的に善悪を判断できなかったということ。

補 「合理的」は論理的に筋道を立てて理解するしかたの意。

問 **◉「それだけで」（7行目）とは、どのようなことを指しているか。**

答 この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ（だけで）。

補 「それ」が指す具体的な事態は、「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」である。「だけで」の限定は、行

為の善悪を判断する根拠と判断のしかたを意味する。行為の善悪の判断が、合理的な根拠を欠いたまま、その場の雰囲気に左右されて理屈抜きで、情緒的、感覚的になされる、ということである。

●一九〇ページ

問 **「言わぬと、これだぞよ。」（2行目）の「これ」とは、どのようなことを指しているか。**

答 刀で切り捨てること。

補 次行の「太刀の鞘を払って」云々とある点に気づかせる。

問 **老婆が「両手をわなわな震わせて」（9行目）いるのを見て、下人はどのような気持ちになったか。**

答 ある仕事をして、それが円満に成就したときに味わう、安らかな得意の気持ちと満足な気持ち。

補 憎悪の気持ちは消えており、下人の抱いた正義感は、すぐ冷めてしまうような衝動的な正義感であったことが分かる。

問 **「肩で息を切りながら」（6行目）とは、老婆のどのような状態の描写か。**

答 驚きと恐怖のために、苦しそうに、肩を上げ下げして呼吸をしている状態。老醜を表す描写。

問 **◎「この意識は、……冷ましてしまった。」（9行目）とあるが、なぜか。**

答 恐怖におののく老婆の生死を完全支配した下人の優位性によって、憎むべき対象として感じられなくなったから。

補 下人の悪を憎む気持ちは、自分の了解を超えた異常事への衝動的、感情的な反応にすぎなかった。老婆に対する自己の優越を意識して、感情の過度の高ぶりはその対象を見失ったのである。

問 **「ある仕事をして、それが円満に成就した」（10行目）とあるが、ここでの「ある仕事」とは、具体的にどのようなことか。**

答 許し難い悪人を取り押さえること。

補 困難極まる使命を見事成し遂げた英雄的行為という思いに浸る下人の心理。

問 **◎わざわざ「役人」であることを否定して、「旅の者」（13行目）と名乗ったのは、なぜか。**

答 自分を満足させた行為について、秩序を守るための正当なものに擬えたうえで、盗人になろうとした過去を隠しつつ、老婆に捕えられる心配がないことを示し、詳しい事情を物語らせようと思ったから。また、主人から暇を出された失職の身だと本当のことも言えず、また、今、この羅生門にいることへの負い目もあったから。

補 「少し声を和らげて」とある下人の意図を考える。

●一九一ページ

問 **老婆の目、唇、喉、声の描写は全体としてどのような印象を与えるか。**

答 まだ油断できない得体の知れない薄気味悪さに包まれた印象。

補 無力に捕らえられたとはいえ、安心できない得体の知れなさがある。比喩の効果的使用にも注意。

問 **◎「平凡なのに失望した」（6行目）のは、なぜか。**

答 老婆の行為の動機が、自分の正義感や悪を憎む心に見合わないものだったから。

補 期待と結果との落差が生む失望。悪の光彩を放っていた老婆の行為は、あまりにも現実的で卑小な動機による凡庸な行為へと色あせてしまう。老婆の行為のその動機が、自分の正義感や悪を憎む心には、見合わないものだったのである。

問 **「前の憎悪」（6行目）とは、どのような憎悪か。**

答 「死体の髪を抜く」という「悪」の行為への憎悪。

補 同じ対象への憎悪であるから、「前の」と指示されているが、内容としては、「異常な悪」への怒りの憎悪から、「つまらぬ悪」への侮蔑の憎悪へと、対極化している。また、論理的、合理的な判断から出たのではなく、その場の気分に従う感情的な心の動きという点では同じ傾向を示している。

問 「その気色」（7行目）とは、どのようなことを言っているか。

答 心に老婆に対する「失望」「憎悪」「侮蔑」の気持ちが生じたと感じられる下人の様子。

補 「気色」は態度や表情に表れた心の状態。下人の表情や態度に微妙な変化が起こったのである。

問 「片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり」（8行目）という描写から、何が読み取れるか。

答 手に入れたものをあくまで手放すまいとする老婆の執念。

補 老婆の行為が生きるための切実さに基づいていることを明らかにする描写である。

問 老婆が「なんぼう悪いことかもしれぬ。」（10行目）と言いながら、後で「わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。」（一九二ページ・1行目）と言う根拠は、どのような科白に示されているか。

答 「せねば、飢え死にをするじゃて、しかたがなくすることじゃわいの。」

補 生きるためにしかたがなくすることになった自分の行為は悪ではないという論理。

●一九二ページ

問 ⊙「大体こんな意味」（4行目）とあるのは、なぜか。

答 老婆の論理の要点を二点に絞ってまとめると、①悪には悪で報いてもよい、②生きるためにしかたなくした行為は悪ではない、となる。下人は、女の死体から髪の毛を抜く理由を必死に詳細に語る老婆の心情には関心がなく、自分に都合のいい箇所以外は聞き流しているかもしれないから。

補 老婆の自己弁護のための論理であることを確かめる。

問 ⊙「この男には欠けていた勇気」（8行目）とは、どのような勇気か。

答 盗人になることを積極的に肯定する勇気＝果断に悪を選択し、実行する勇気。

補 「さっき門の下で」とは、『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいたのである。」（一八五ページ・8行目）とある箇所を指す。

問 ⊙「この老婆を捕らえたときの勇気」（9行目）とは、どのような勇気か。

答 悪の所行を断じて許さない勇気＝悪を憎み懲らそうとする勇気。

補 「あらゆる悪に対する反感」（一八八ページ・15行目）から発した勇気を指す。

問 「そのとき」（11行目）とは、具体的にはどのようなときか。

答 下人の心に「ある勇気」が生まれてきたとき。

問 「飢え死になどということは」（11行目）「意識の外に追い出されていた。」（12行目）のはなぜか。

答 心の中で「盗人になる」（悪に踏み切る）決断を下してしまったから。

補 老婆の論理をてこにして、「盗人になる」ことへの迷いを振り切っている。

問 「きっと、そうか。」（13行目）と念を押すのは、何を確認するためか。

答 老婆の論理が間違いなく語られたとおりのものであること、さらに、老婆自身が自分の論理を正しいと確かに信じていること。

補 下人が老婆に対して「引剝ぎ」をする決心をしているところから出た言葉である。

問 「嘲るような声で」（14行目）というのは、ど

のようなことへの嘲りの気持ちを表したものか。

答 老婆の論理が、下人による老婆自身への「引剝ぎ」の実行に、立派な口実を与えてしまうものであると同時に、最初の被害者が皮肉にもその論理を教えた老婆であること。

補 老婆の論理は、下人が迷いを断ち切り、「盗人になる」決断をする格好の口実になるだけにとどまらず、その実行の手始めに老婆に対して「引剝ぎ」を行うことまでも正当化する口実を与えるものである。下人による生きるための老婆への加害を、老婆は許さなければならないという皮肉。

●一九三ページ

問 **◎「では」（1行目）は、どのような内容を受けているか。**

答 老婆の論理の内容、すなわち、飢え死にをしないためにしかたがなく悪事を働いても、それは悪とは言えず許されるものである、ということ。

補 老婆の論理の骨子を再確認させる。

問 **下人が老婆の着物だけを剝ぎ取って去ったのは、なぜか。**

答 下人にとって「盗人」へと踏み出すこと（悪へ踏み切ること）が行為の意味（目的）だったから。

補 主典拠の「今昔物語集」では、老婆の着物のほかに老婆の抜いた髪、死人の着物まで奪っている。作者の創作意図による変更である。初体験のために落ち着きを失って慌てたというのは、下人の確信の強さと老婆との力の差から見て不自然である。

問 **「夜の底」（5行目）の「底」はどのような視線からの描写か。**

答 羅生門の楼上から下の深い闇へと注がれた視線。

補 舞台の情景であり、同時に象徴的な意味を持つ表現であることにも注意する。

問 **「下人の行方は、誰も知らない。」（12行目）という結びは、初出の「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」と比べて、どのような表現効果を生んでいるか。**

答 その後を不明とすることで、下人の運命が限定された方向づけから自由になり、深い謎に包まれたものとなる効果。それにより、個々の読者の想像力が刺激される。

補 推敲の努力が生かされた結末の意図を捉える。断絶感や余韻が生まれるという漠として抽象的な言い方は避けたいが、読者によっては詩的効果が生まれる可能性もある。

語句の研究

●一八二ページ

1ある日の暮れ方のことである。　「ある日」という書き出しは、物語的、説話的発語であるが、近代小説としての冒頭の重みは、「暮れ方」という語の方にある。「暮れ方」は昼と夜の〈境界〉、光から闇への移行の時、日常世界の変容に出会う〈逢魔が時〉を指示して、以後の展開を促す。

1一人の下人　ここで「一人」は「或る」の意だが、後に（P一八二・3、6）繰り返しで語られる「この男のほかに（は）誰もいない。」によって、「一人」が「独り」と読み替えられる意味を潜在させている。「下人」は、主に仕えて下働きをする身分の低い男。

1羅生門　本来「羅城門」と書くが、近世以降「羅生門」と慣用化されていった。「羅城」は城（都）を羅（めぐ）りおさえるという意味。「羅生」は「生を羅（かいかつ）る＝生の実相を究める」を含意させるために採用された表記であろう。朱雀大路の南端に位置し、平安京の玄関口となる轍ぶき、二重閣、朱塗りの総門である。洛中洛外を区切る〈境界〉であり、作品では、地上と楼上を舞台として、生と死の交錯、日常世界と非日常世界の転換を促す〈門〉の役割を持つ。

キー・ポイント　「日暮れ」と「羅生門」　物語は「日暮れ」に始まり、「黒洞々たる夜」に終わる。また「羅生門」の門下から始まり、楼上へ舞台を移した後、門下へ戻る場面で終わる。時間的、空間的な〈境界〉が光と闇、静と動、生と死、善と悪、日常性と非日常性などの対比を際立たせて、変容の舞台となる。

3きりぎりす　原文は「蟋蟀」に「きりぎりす」とルビがある。人気のない雰囲気を強め、男の孤独感にふさわしい。古典のキリギリスは現在のコオロギだが、コオロギなら「夕冷え」とともに晩秋の寂しさにふさわしく、キリギリスなら「丹塗り」の柱との色彩の対比でただ一匹の印象が強まる。荒廃した無機質な円柱と有機物のきりぎりすとの対比から寂寥感を強調している。

3朱雀大路　平安京の中央大路であり、本来人通りがにぎやかな街路。

4市女笠　平安時代以降、上流女子の外出用のかぶり物。ここは、それをかぶった女を指す換喩法の表現と対比して「は」のあるなしの強調の度合いの差を考える。反復したうえで念押しをする対応の妙を指摘する。

4揉烏帽子　貴族の男子の平常服の折のかぶり物。「市女笠」と同じく換喩法でそれをかぶった男を指す。

4それが、この男のほかには誰もいない。　「それが」は予想に反する意を示す接続詞。「この男のほかに」は三回反復される。「この男のほかに誰もいない」（P一八二・2）「この男のほかにも……ものである。」（P一八二・3）とあり、ここで念押しする。人気のない羅生門に、この男のいることの異常を指摘し、物語の非日常性を強く指示する表現。

6この二、三年　平安末期を指す。

7旧記によると、仏像や仏具を打ち砕いて　真実性を強めるための表現。鴨長明の「方丈記」第五段の養和年間（一一八一年）の大飢饉を叙した一節がそれに当たる。仏像仏具の破壊は、信仰心すら失せた末法の世の荒廃を示し、規範の喪失、価値の転換という面から作品世界の展開を支える意味を持つ。

12日の目が見えなくなると　ここでは暗く

なると、の意。「日の目」は、日の光、太陽光線。普通〈日の目を見る〉は、世に埋もれていた物事が初めて世間に知られる意。

●一八三ページ

1 足踏み　ここは、足を運ぶ、足を踏み入れる意。

7 それがごまをまいたように、はっきり見えた。　「ごまをまいたように」と眺める視線は、空を覆う「夕焼け」に包まれた羅生門のシルエットを距離を置いて浮かび上がらせる位置からのものであろう。死人の肉をついばみに来て、流れ出る血の色のイメージを喚起させる赤い「夕焼け」と死者の使いを暗示させる黒い「鴉」の群れは羅生門のたたずまいに不気味な感じを加えている。

10 刻限が遅いせいか、一羽も見えない。　刻限の他に雨のせいもあろう。人はおろか鴉さえ不在の「この雨の夜に」（P一八九・7）、男が一人いる特異さが際立つ。

13 七段ある石段　羅生門の石段は実は五段である。後の小説「偸盗」（大六）では正しく五段となっている。七段が羅生門の規模にふさわしいと考えたのかもしれない。

14 紺の襖の尻を据えて　「襖」は宮中武官の礼服の腋わきのあいた袍ほう、また公家の常用服の「狩かり襖あお」（裏をつけた狩衣）を指すこともあるが、帯刀と共に庶民にはふさわしくない。当時、一般の普段着であった袷あわせ、裏をつけた上着のことであろう「尻」は着物の場合、後部に垂れた裾をいう。「襖の尻」を石段に敷くように座ると取れる。「尻」を身体部位ととれば、「襖」を着ていて腰を下ろす様子である。

15 大きなにきびを気にしながら　下人がまだ若く、その心の動きや行動に若さゆえの振れ幅があることを予想させる。

キー・ポイント　にきび　「にきび」の表現は、他に「赤くうみを持ったにきびのある頬である。」（P一八六・9）、「もちろん、右の手では、赤く頬にうみを持った大きなにきびを気にしながら」（P一九二・6）、「不意に右の手をにきびから離して」（P一九二・15）と、四箇所ある。他の身体の特徴の描写を省き、主人公をこの一点で印象づける。若い男の生臭さ、精神や行動の危うさ、感情の振れ幅などを感じさせる。

「王朝時代の人間にも、にきびのないこともあるまいと云う、謙遜すれば当推量によったのであるが、その後『左経記』に二君とあり、（略）今日のにきびであることを知った。」と作者は語っている（「澄江堂雑記一」）。

16 ぼんやり、雨の降るのを眺めていた。　再び冒頭の「雨やみを待っていた」下人の現在に言及することで小説の語りを一区切りさせ、次の展開を呼び出す描写である。

●一八四ページ

13 作者はさっき　「語り手」が「作者」であると表明することで、「作者」の視点から物語られることを読者にはっきり示す。語り手の視点から作品世界を一元的に把持し、状況を説明したり、登場人物を外から眺めたり、また、その内面に踏み込んで心理を分析したり、意見や評価まで表明するのは、すぐれて近代小説的な手法である。

キー・ポイント　「語り手」＝「作者」　小説の「語り手」が作者とは限らないことを先に確認し（猫が語る例、作者とは違う「わたし」が語る例など）、羅生門の「語り手」の特徴を考える必要がある。

羅生門では「作者」が語り手であることを表明している。「さっき、……と書いた」（P一八四・1）、「前にも書いたように」（P一八四・3）と語り、「旧記によると」

（P一八二・7）、「旧記の記者の語を借りれば」（P一八八・9）と旧記に言及する。この語り手は作品の中の現在を語りながら、思い出したように作品の外に出て〈書いている自分〉を読者にアピールする。例えば、「この男のほかに誰もいない」と語る際、語り手は〈作中の現在〉の時間に沿っている。ところが「旧記によると」と語ったとき、この語り手は、この作品を書きつつある〈現在〉から、旧記に言及している自分の姿をあらわにする。作品の外の、現実の歴史の一時点から作品に介入して語ることで、自分の語り（＝記述）の真実性を現実に残された文献で保証しようとする知的なたくらみが見える。「作者はさっき」云々と語る場合はもっと露骨である。読者は作者の視点に同化させられて下人を中心にした物語を読まされるわけである。意地悪く見れば、正確な語り（記述）を心がけるそぶりの裏に、読者に書く自分を印象づけようとする気負いを読み取ることもできる。Sentimentalisme というフランス語の使用にもこれに通底する傾きがある。

3 その主人からは、四、五日前に暇を出された。

主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ラセウモンニノボリテシニンヒトヲミルトヌスミビトヲカタルコト）」では「摂津（ツ）ノ国辺（ノホトリ）ヨリ盗（ヌスミ）セムガ為ニ京ニ上（ノボリ）ケル男」となっていて、初めから盗人として上京した設定である。小説では、「盗人になること」を選ぶことが主要な動機（モチーフ）であり、「四、五日前に暇を出された」とすることで、下人の追い込まれた状況がはっきりする。

4 この衰微の小さな余波　「衰微」は、衰え弱ること。京都全体の社会状況を指す。「余波」は物事の及ぼす影響。不況下の失職という個人の力では抗し難い成り行きが、社会の片隅に生きる下人にも及んだ事情を言う。解雇の事情は語られていないが、下人に特に不始末があったのではないと考えてよいであろう。主典拠の「今昔物語集」にはない設定で、主人公が京の町から来たと取りうる記述。（これには異論もある。）

8 そのうえ、今日の空模様も……下人の Sentimentalisme に影響した。

「Sentimentalisme」（フランス語）は、感傷癖、物事に感じやすく感情が刺激されやすい傾向。「そのうえ」とあるのは、失職に加えて、雨も下人を羅生門にとどめて、下人の Sentimentalisme を深めるからである。

キー・ポイント　Sentimentalisme　情緒的反応に走りがちな下人という設定は、後に老婆の行為を「許すべからざる悪」（P一八九・8）と決めつける行動を見るうえでも重要。「平安朝の下人」にフランス語の表記をそのまま用いたのは、この作品が歴史小説の体裁の下に、近代的な人間心理を中心に描く小説であることを物語る。知的ハイカラ趣味とも見えるが、翻訳不可能なニュアンスを生かそうとしたのであろう。

9 申の刻下がり　今の午後四時過ぎ。「下がり」は、その刻限を少し過ぎたことを言う。「申」は動物の比喩「猿のような老婆」（P一八八・5）を導き出す伏線。さらに、十二支の順で言えば次の「酉（トリ）」へとつながり、「鶏の脚のような」（P一九〇・3）を呼び込む効果があると思われる。

10 どうにもならないこと　「衰微の小さな余波」の結果、「明日の暮らし」も成り立たないまでに追い詰められた状態。

10 とりとめもない考え　終わりがなく、まとまりのない考え。後の「何度も同じ道を低回した」（P一八五・4）考え。

11 聞くともなく聞いていたのである。　「と

りとめもない考え」に心を奪われた下人に、雨の「ざあっという音」（P一八四・13）がそれと意識されないまま不安を加える効果を出している。

13 雨は、羅生門を包んで、……重たく薄暗い雲を支えている。　羅生門を包む「雨」と「夕闇」は下人を追い詰める状況の、「重たく薄暗い雲」は下人の暗澹たる心の、暗喩となる。「雨は……」「夕闇は……」「門の屋根が……」の擬人法が羅生門をめぐる空間を動的にし下人に迫る印象を利かしている。陰鬱な羅生門の情景が、主人公の重苦しい心象風景に重ってくる。

16 手段を選んでいる暇はない。　明日の暮らしを成り立たせる手段を選り好みする余地などない。「盗人になる」以外の手段を思案する暇はない。

16 選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。　生か死かの瀬戸際にあっては、生存することが第一義であり、手段の選択について善悪の判断に迷うのは二次的な問題にすぎないという冷厳な事実の確認。ただし、これは下人の「途方に暮れた」心理の動きは語っても、本当に下人の生存が〈限界状況〉まで追い詰められていたことまでは意味しない。迷っていること自体が、せっぱ詰まっていない証拠である。下人は、まだ、結論をためらったまま「ともかくも、夜を明かそう」（P一八六・2）と明日への先延ばしができる程度の状況にある。

●一八五ページ

3 選ばないとすれば――　下人の選択は、実際のところ、手段を〈選ぶ〉〈選ばない〉の二者択一の問題ではない。生き延びることを考える限り、手段を〈選ばない〉という帰結は論理的には最初から自明である。「――」による中止は、盗人になることの躊躇を表しているが、ここに来てやっと盗人になるという選択肢につきあたった。だが、「電着した」の後の「しかし」で、「この局所」はまたひっくり返される。

4 何度も同じ道を低回したあげくに、やっとこの局所へ逢着した。　「低回」は、本来首を垂れて思案しながら行きつ戻りつしている様子。下人は座っているのだから、ここでは、考えの筋道の上で立ち迷うことだが、生きる道に行き悩んで思案投げ首で歩き回る下人の姿がおのずから重なる効果的な表現。「局所」は、全体の中の限られた場所のこと。「逢着」は、出会う、到着する意。「この局所」は、「選ばないとすれば――」を指す。思考の目下の帰着点である。

キー・ポイント　やっと　考える過程で、論理上それ以外にはないという絞られた場所（「選ばないとすれば」という条件の部分、これがすなわち、「この局所」の指すところである）までは認めざるをえないということを、〈ようやく〉認めたのである。したがって、「やっと」は、答えが見つからないまま何度も考えた末に、やっと答えを見つけたという、純論理的な推論の上のことではない。下人にとって、「飢え死にを逃れる」ためにはどんな非常手段をも取る以外にないこと、つまり、生きるためには「盗人になる」ほかに生きる術がない事実は論理を持ち出すまでもなく、初めから分かっているのである。だが、心理的には、それを直視してはっきりと認めることをためらう気持ちが「低回」を生んでいる。

5 この「すれば」は、……結局「すれば」であった。　「選ばないとすれば」の「すれば」を取り立てて「　」で示したもの。「すれば」という条件から導かれる論理的に明白な次の結論を避けようとする下人の不決断の指摘である。

キー・ポイント　**「すれば」**　仮定条件の形をとってはいるが、思考の理路の上では、「仮に～としたならば」という仮定の意を示すものではない。思考の理路（論理の展開）の局所に当たる「手段を選ばない」という一応の帰結は、下人にとって、必然的、確定的な条件である。生存の論理として「すれば」は「手段を選ばない以上」という確定条件であり、その後に続く最終的な帰結（「盗人になる」）も明白である。だが、論理的には確定的でも、心情的にはそれを認めることへのためらいがあるために、「すれば」を押し破れないのである。要するに、下人は理屈の中で立ち迷うだけであり、いやでも結論を出さざるをえないせっぱ詰まった状況にあるとも、追い込まれた心理状態にあるとも感じられない。限界状況下の生存の危機という切迫した立場を読み取ることは困難である。むしろ、主を離れた男として、今後の生き方を旧来の主に仕える道にではなく、己を立てる道に求める志向性を潜めながら、具体的にはただ「盗人」しか思いえない未熟な狭さゆえに、「盗人」の道の選択に必然の契機を見いだせないでいる甘さが、ためらいを生んでいるとみなすほうが、この下人にはふさわしい。

7この「すれば」の片をつける　「片をつける」は物事を決着させる、処理する意。「すれば」で立ち止まらず、最終的な論理的帰結に至り、「盗人になること」を肯定すること。

9積極的に肯定するだけの、勇気が出ずにいた　生存を第一義として「盗人になる」ことを選択する勇気、すなわち、「盗人になる」ことへのためらいを踏み破る果断さが、欠けていること。ここでは、踏むべき二段階の過程が一緒くたにされている。まず、論理的な帰結を論理上肯定するだけなら、ためらう必要はない。次に、論理の結論に従って実際にやるかどうかの決断の問題が起こる。ここで初めて、ためらいが起こる。「勇気」の語はこの決断の段階にかかわる。下人は、自分の明日の生き方に実際にかかわる問題のために、論理的な結論を心理的に肯定できないのである。そこで「積極的に」という語が特に加えられているのである。副助詞「だけ」はここでは限度の上限を示す。「十分に～に至るまで（の）」の意。

キー・ポイント　**勇気の欠如**　結論がほかにはないのに、ためらいがあるのは、一般的道徳感情による「悪」を忌避する心理、決断してもその先が分からない不安の心理などがあるからであろう。もともとそんな気力も体力もないと臆する傾向があったためかもしれないし、利害得失を計算する心持ちもあったかもしれない。第二段で「悪」への憎悪が中心的に語られることから、語り手は、ここで「悪」を選び取る問題に読み手を誘導していると考えられる。この観点に立てば、生き延びる手段の選択と自己を支配する道徳感情との狭間にあって、思案に暮れている状態が勇気の欠如である。だが、「盗人になる」ことは「悪」だから、下人は「悪」への決断に迷っていたのだと直ちに言いかえることはできない。ただ、「盗人になる」決断に迷っていたと言えるだけだ。善悪の問題を立てるとしても、下人の道徳感情は、世間的、一般的な善悪の価値基準を超えるものではない。まして極限状況下の実存にかかわる善と悪の問題と考えるには、下人の勇気のレベルは緊張感を欠き、平板な躊躇の域を出ていない。

11大きなくさめをして、それから、大儀そうに立ち上がった。　「くさめ」はくしゃみ。

「大儀」は骨が折れる、面倒でおっくうなさま。雨の中、夜の寒さが迫る中で、肉体的、精神的な疲労が下人の動作を緩慢にしている。寒さが身にしみて立ち上がったのだが、同時に考えるのに疲れてきたと言える。

12 火桶　この語で秋の深まりを示す。

14 きりぎりすも、もうどこかへ行ってしまった。　時間の経過と一層の寂しさを示す。

●一八六ページ

4 どうせ死人ばかりである。　「人目にかかるおそれのない」とあるように、肉体的、精神的な疲労から、人に煩わされずに休めればどこでもよいという投げやりな気持ちを示す。羅生門の現状を知っていたことは、下人が都の内から来たのか、それとも都の外から来たのかを考える際のヒントになる。

4 聖柄の太刀　下人が「太刀」を帯びていることが初めて明らかになる。以前の仕事に関係するのだろうか。武に心得のある若者なのか、若者にありがちな虚勢や見栄なのか、考える余地がある。太刀が「盗人になる」選択を自然に促していたという面もあろう。第二段以降の下人に必須のアイテム。

5 鞘走らないように　刀身が鞘から自然と抜け出てしまわないように。

5 そのはしごのいちばん下の段へ踏みかけた。　足に焦点を当てて、いったん場面を切る働き。テレビドラマでなじみの暗転の手法。

7 一人の男が　「それから、何分かの後である。」という時間の断絶による場面転換によって、新たな事態の発生を告げる。「下人」という呼び方を用いず、「一人の男」として第三者的に客観化した視角で、あらためて新場面を読者に印象づけている。「にきび」によって下人だと分かる仕掛けである。

8 猫のように身を縮めて、息を殺しながら　「身を縮めて、息を殺しながら」は、同じ「縮める」の語を用いながら、前段の「首を縮めながら」（P一八五・16）の緩慢な動作とは対照的に緊迫感に満ちた展開を促す。危険に対して身構える動物的な本能を感じさせ「猫のように」の直喩が利いている。心理的な静から動への転換でもある。

9 赤くうみを持ったにきびのある頬である。　「男」が前段の「下人」と同一人物であることを確認させ、再び「下人」に戻すための仲立ちをする効果がある。また、火に照らされた「赤くうみを持ったにきび」は、下人の高まる緊張感と恐怖心を効果的に描写している。

●一八七ページ

2 高をくくっていた。　せいぜいその程度と決めてかかる。前段の「どうせ死人ばかりである。」（P一八六・4）を受ける。

4 すぐにそれと知れたのである。　「それ」は「上では誰か火をとぼして、……動かしているらしい。」（P一八七・3）を指す。

5 この雨の夜に、この羅生門の上で　人間はおろか生き物の影さえ絶え、雨と闇に囲繞された羅生門の楼上は、濃密な恐怖の雰囲気をたたえた不気味な非日常的世界として現出している。「この」はその異常な状況を強く指示する。誰かがいるとすれば、それ自体がすでに異常なのだ。「どうせただの者ではない。」（P一八七・5）はずだ。

5 火をともしている　「ともす」と「とぼす」（P一八七・2）のマバ行相通で変化をつけている。「とぼす」のほうが非日常的で異常事態の描写に、一般的な「ともす」が指示、説明の文脈で、と使い分けられている。作者の文体への細部までのこだわりの一例。

6 やもりのように足音を盗んで　「足音を盗

む」は、足音をさせないようにそっと。人間の気配を消して闇をはう下人に、夜はい出してきて捕食行動をする「やもり」の直喩は的確である。

9 幾つかの死骸が　散乱する死体の具体的な描写は原典には見られない作者の独創で、「或阿呆の一生」に芥川の解剖見学の記事が見える。「彼はその死体を眺めていた。それは彼には或短編を、(f)(g)王朝時代に背景を求めた或短編を仕上げる為に必要だつたのに違いなかつた。が、腐敗した杏あんずの匂に近い死体の臭気は不快だつた。」（「九死体」）。また、恒藤恭あての書簡に「医科の解剖を見に行った。二十の屍体から発散する悪臭には辟易せずにはいられなかった。」（大正三年三月十日）とある。

11 裸の死骸と、着物を着た死骸　盗人や琇に荒らされた死体と最近運ばれてきた死体であろう。

16 永久におしのごとく黙っていた。　「おしのごとく」は沈黙の死の世界の比喩であろうが、人権意識の点で問題を含んでいる。教場での指導に当たっては、十分に配慮していただきたい。後出「おしのように」（P三一・10）も同様である。

●一八八ページ

2 ある強い感情が、……この男の嗅覚を奪ってしまった　「ある強い感情」とあるのは、予期しない突然の衝撃の強さを強調する。その後、分析的に「下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は息をするのさえ忘れていた。」（P二九・11）とあらためて説明される。「ある強い感情が……奪ってしまった」という欧文直訳体擬人法の表現も、不意打ちの衝撃の強さを印象づける。

4 檜皮色の着物を着た、……猿のような老婆である。　「強い感情」に促されて目を剝いたまま、一気に老婆に関心が集中してゆく下人の反応が、「檜皮色の着物」「背の低い」「やせた」「白髪頭」「猿のような」という形容の畳みかけによって示されている。特に最後の「猿のような」という動物の直喩は、他の描写が個々の属性を示すのとは違って、老婆の存在全体を一つかみにして異形の者としての印象を決定的にしている。前行に「人間を見た」とあるが、まともな人間として見えるはずがない。

8 六分の恐怖と四分の好奇心　「ある強い感情」（P二九・5）を分析的、説明的に敷衍して、好奇心とないまぜになりながら、より恐怖心が勝った心理状態を六分、四分と数量的に表現した。「恐怖」と「好奇心」はともに、全く思いがけない事態に直面した衝撃に対する本能的な反射心理である。その強度の緊張が呼吸さえ忘れさせている。

9 旧記の記者の語を借りれば　「今昔物語集」巻二十四第二十話「人妻成悪霊除其害陰陽師語」に「頭毛太リテ怖シキ」とあり、巻二十七第十六話「正親大夫、□若時値鬼語」に「頭ノ毛太リテ、心地モ悪ク思エケレバ」とある。同じような表現は、巻十二、巻十四にもある。「頭身の毛も太る」は異常な恐ろしさの形容。身の毛がよだつ。

11 猿の親が猿の子のしらみを取るように　既出の「猿のような老婆」（P二九・8）を受けて、老婆の行為が動物の本能的なしぐさとして印象づけられる。猿が毛を掻き分けては一匹ずつしらみをとるように、毛根を分けて次々と抜き取るさま。「申の刻」（P一八八・5）を受けての芥川の遊び心かと想像してしまう表現である。

12 髪は手に従って抜けるらしい。　頭皮の腐敗のために、手を引けばそのまま抵抗なしに抜けていくさま。その自然さが一層の不

気味さを感じさせる。

13 その髪の毛が、……恐怖が少しずつ消えていった。　刺激に慣れるにつれて反応が弱まっていくという現象（反応強度の逓減化）。髪の毛が抜けるのを繰り返し見るのに応じて順次恐怖が薄れてゆく心理過程を論理的、段階的に語る理知的、技巧的な表現。

14 この老婆に対する激しい憎悪　死者を冒瀆する行為のおぞましさに対する拒絶反応から生じた怒り。一般的、世間的な道徳感情による善悪の判断から出た反応ではなく、衝動的、直感的な倫理感覚として、また生理的な身体感覚として、人間のあり方そのものを汚すものへの嫌悪感に由来する「悪」への憎しみである。

14 少しずつ動いてきた。　恐怖感が沈静化し判断力が相対的に回復する。その結果、老婆を異様な存在と見ることから、人間として見ることへの転換が起こる。この過程で、おぞましさに対する拒絶反応は恐怖から憎悪へと形を変えてゆく。

15 あらゆる悪に対する反感　この「悪」は、醜怪さにおいて、人間の日常性の範囲を突き破り、人間性の根源を掘り崩す行為である。人間のあり方の根源に触れた禁忌の侵犯としての絶対悪と見なされるがゆえに、一般的、世間的な道徳感情に由来する相対的で個別的な悪（例えば「盗み」のような）をとがめる次元を超えて、「悪」そのものへの絶対的な否定、「悪」の存在自体を全否定する反応をもたらす。

16 一分ごとに　「分」は、時間の「分」であろう。少なくとも数分間は老婆の行為を見つめていたことが分かる。少し前に「六分の恐怖と四分の好奇心」（P一八八・8）の表現があり、「恐怖が少しずつ消えていった。」（P一八八・13）「激しい憎悪が、少しずつ動いてきた。」（P一八八・14）とあるので、「分」を量的に解する可能性も皆無ではないが、その場合は「一分ずつ」とあるのが自然。

●一八九ページ

3 老婆の床に挿した松の木切れのように　たいまつの火を憎悪の燃え上がる比喩に使っている。景と情の融合した印象的な比喩の使い方である。

6 合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。　行為の理由（動機）が不明な以上、行為を筋道立てて納得のゆく形で善悪の判断を下すことができない。「合理的」は理にかなう意。論理的。

7 この雨の夜に、この羅生門の上で　この表現は、梯子を上がりかけた場面に既出（P一八七・5）。そのときなされた「どうせただの者ではない」という予断が楼上の老婆の行為を目撃して確信となる。

7 それだけですでに許すべからざる悪であった。　「それ」は、直前の「この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くということ」を指す。陰惨な雨と闇に包まれ、寄りつく者もなく荒廃を極めた羅生門の不気味で異常な空間でなされる老婆の不気味で異常な行為は、そのおぞましさに対するほとんど生理的な嫌悪感から一切を判断させてしまうがゆえに、理屈抜きの本能的な否認の対象である。「それだけで」という強い限定は、下人の判断が、合理性を欠き、衝動的な、その場の雰囲気に左右される情緒的な反応においてのみなされていること、いわば気分の問題にすぎないことの確認である。人間性の根源にかかわる善の表出は、感情的、瞬間的な正義感を活性化する。だが、これはその場限りの生々しい気分の噴出というあり方のために、日

常的な行為の次元では永続できずに終わるのである。一考として、人間の死体遺棄が日常化する門の上で、暗闇と憂鬱な雨が支配する中、死体の冒瀆という人倫を犯す行為に悪を許さない潜在意識のスイッチが入ったという解釈もできる。

8もちろん、下人は、……盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れているのである。

「とうに忘れているのである」という言い方に、軽薄に心変わりする下人に対する語り手の揶揄的な響きを読み取る見方がある。だが、そもそも、下人が強い覚悟で「盗人になる気でいた」のでないことは明らかだ。「悪」に踏み切る寸前まで行っていたのに、たちまち「悪」を憎悪する側に回ったとみるから軽薄な転向に見えるにすぎない。実際は、「盗人になることを〈考えていた〉」こととなぞは、とうに〈消し飛んでしまった〉」ので、衝撃の強さは言えるとしても、軽薄な心変わりなどという大それたものはない。「盗人になる」ことがすでに潜在的に心の志向としてあったに違いない。が、それと実際に「やる気になっていた」との間には踏み越えるべき断絶がある。「盗人になる気でいた」とあえて断言的に語る語り手の意図的な軽薄に、読み手が乗ることはない。「もちろん」は、〈言うまでもなく〉、「飢え死に」か「盗人」かなどに心を向ける余地もないほど下人の心理は切迫していたという状況の確認である。「このとき、誰かがこの下人に、……問題を、あらためて持ち出したら、恐らく下人は」（P一八八・16）とあるように、「飢え死に」か「盗人」かいう問いは、ここでは、第三者による仮の設定であり、下人自身にそんな余裕はない。

キー・ポイント　悪を憎む心　「盗人になる」以外に選ぶべき道はないと考えていた下人が、老婆の行為を見て「何の未練もなく、飢え死にを選」ぶのでは、唐突で軽薄、単純かつ身勝手、無反省な下人の幼児性すら示すものであるという批判が起こるのは不思議ではない。だが、これは人間にとっての「善悪」の意味を平板に一元的に捉えたための誤解である。「盗人になる」という場合の「善悪」と「死者の冒瀆」の場合のそれとには断絶がある。〈盗人にも三分の理〉というように、「盗人になる」場合の「悪」は相対世界の道徳的価値判断に左右される問題である。しかし人間性の禁忌に触れる「悪」は何人によっても人間の名において断罪されうる次元にかかわっている。たとえ下人が「盗人になる」悪を心に抱いていたとしても、そのことがただちに「死者の冒瀆」を憎悪する善に立つことと矛盾するとは言えないのである。状況に促されたある瞬間には、人間は、たとえどんな世俗の極悪人でも、利害や損得抜きに、その痛ましさに惻隠の情を発し、その酷さに憎悪の情をたぎらせることがある。「盗人になる」悪を第一の選択肢としていたからと言って、下人が老婆の行為のおぞましさに憎悪を燃え立たせたことを〈目くそ鼻くそを笑う〉類の話に矮小化して批判するのは、あまりに形式論理である。下人はここで人間性の根源にある「善」の可能性に触れている。批判がありうるとすれば、むしろ問題はその先にあると言うべきである。人間性の根源から発する善の反応は、以後の下人の行動の帰結に明らかなように、決して持続的に形成されるものではないという点こそ、指摘されねばならない。理路を欠いた衝動的反応にすぎぬために、日常的な行為の場面では、（おそらく宗教的な回心の場合を除いて）、この善は生き延びることはできない。ここで芥川の「蜘蛛の糸」

の主人公の善が結局はたった一回の行為でしかなかったことを思い出してもよい。

13 弩にでも弾かれたように　前行に「老婆が驚いたのは言うまでもない。」とあるように、不意の侵入者に対する驚きによって、老婆が悪鬼でも怪物でもなく、ただの人にすぎないことが早くも示されている。

14 おのれ、どこへ行く。　相手をののしる語気を込める。「おのれ」はここで二人称の代名詞から、感動詞に転じた用法。

●一九〇ページ

2 勝敗は、初めから、分かっている。　若く力のある男とやせ衰えた老婆では勝負にならない。

4 何をしていた。　下人は、老婆の異常な行為をすでに目撃している。実際に知りたいのはその理由である。目撃したことを言わずに、「何を」と問うのは、自分の手の内を見せず、老婆の口から行為の全体を語らせるためである。

4 言え。言わぬと、これだぞよ。　強者の立場から、弱者に迫る言葉で、いかにも性急で、脅しつけるような感じが出ている。

5 白い鋼の色　刀身の換喩である。芥川らしい表現と言えるが、技巧的に凝りすぎているか。冷たい切れ味を感じさせる。

7 執拗く　執念深く。じっと強情に。「しふねし」という古語に、同じ意味の「執しつ拗よう」という漢語を当てたもの。素性の知れぬ侵入者への警戒心が促すかたくなさである。

8 全然、自分の意志に支配されている　「全然」はここでは「全く」「すっかり」の意。老婆が「ただの者」にすぎず、生殺与奪の権が自己の掌中にあることがはっきりした。

9 今まで険しく燃えていた憎悪の心を、……冷ましてしまった。　あまりにも無力な老婆を前に、異常な悪への憎悪は対象を失い、憎むことの根拠が消失する。欧文直訳体で、下人の新たな「意識」こそが中心にあって以下の下人の心理と行動を促すものであることを印象づける擬人法の表現である。

11 安らかな得意と満足とがあるばかりである。　生かすも殺すも自分の思いのままという新たな「意識」は、老婆をみごとに取り押さえた行為の成功に自己満足の味わいを与え、勝者の優越感と余裕を生み出す。

13 検非違使の庁　平安時代に都の警察、検察、裁判の権を握り、治安の維持をつかさどった役所。その役人は職掌から、庶民には権力をかさにした横暴者と見られていたことが考えられる。

13 旅の者だ。　下人が都の外から京へ上った者（主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ラショウモンニノボリテシニンヒトヲミヌスムトコトヲ）」の設定）か、それとも都で使われていた者かは見方が分かれる。京の町で使われていた者とするのが大方の論だが、異論も出されている（「鑑賞」参照）。いずれにしても、「少し声を和らげて」とあるように、老婆に強い警戒心を抱かせないように意図した言葉である。

●一九一ページ

1 まぶたの赤くなった、肉食鳥のような、鋭い目　「肉食鳥」は、猛禽類。他の鳥や小動物を捕食するワシ・タカ、フクロウなどを指す。「鋭い」は、腐肉をあさる貪欲さ、油断のない警戒心、得体の知れない不気味さの表現である。骨と皮の皺だらけの顔の中で、下人を凝視する剝き出しの目の異様さを印象づける。無力に捕らえられたとはいえ、異常な行為の理由がはっきりしない限り、老婆の気味悪さは消えていない。

キー・ポイント　動物の比喩　老婆の存在は、「猿のような」（P一八八・5）「鶏の脚の

ような」（P一九〇・3）「肉食鳥のような」（P一九一・1）「鴉の鳴くような」（P一九一・3）「蟇のつぶやくような」（P一九一・9）と、一貫して鳥獣の様態で身体的に特徴づけられ、これら小動物の生に類する老婆の姿をほうふつとさせる。その動作は、「猿の親が猿の子のしらみを取るように」（P一八八・11）と人間以下の行為を連想させる。いずれも人間の埒外に堕ちた陰にこもる薄気味の悪さを醸し、荒廃の世に動物的な生存としてかつがつ生を営む老婆のいじましさとその裏のしたたかさを印象づける。総じて嫌悪される暗い否定性の趣を持つと言えよう。なお、下人に関しては、「猫のように」（P一八六・8）「やもりのように」（P一八七・6）というように、その本能的な警戒心を特徴づけるものとして、その動作に対して用いられている。

6老婆の答えが存外、平凡なのに失望した。　異常な行動には、それに見合う異常な動機がなければならぬ、という無意識の期待が外されたために起こる失望。老婆の答えは下人の期待に反してあまりにも現実的で卑小なものであった。「存外」は思いの外。

6失望すると同時に……心の中へ入ってきた。　老婆の答えが失望をもたらすものであったことは、先の「死体の髪を抜く」行為への憎悪をあらためて生じさせる。つまらぬことで自分に驚愕を強いたことが許せないのである。「前の憎悪」とはいっても、死者冒瀆の醜怪さへの人間的反応としての憎悪ではなく、卑小な目的のための功利的で醜悪な行為への憎悪である。下人は「許すべからざる悪」を懲らした「得意と満足」を味わっていた。ところが実際の相手は、「平凡な」悪の鏑びた銭せんにすぎず、その結果、己の行為自体も価値の下落を強いられるのである。下人の心中で勝利の自己満足は色あせ、つまらぬ悪への侮蔑が頭をもたげる。

8片手に、まだ死骸の頭から奪った長い抜け毛を持ったなり　下人と争い、取り押さえられ、腕をねじ上げられても、老婆は自分が抜いた髪を片手に握ったまま決して離そうとしない。生きるための行為の切実さが如実に示されている。だが、「憎悪」と「冷ややかな侮蔑」の心で老婆を見る下人の目には、この切実さは全く映らない。

9蟇のつぶやくような声　いわゆる濁だみ声ごえであるが、動物の直喩により老婆の醜悪さを印象づける。

11そのくらいなことを、されてもいい人間ばかり　老婆が羅生門の死人たちの生前の行状をすべて知っていたとするのは不自然。引き取り手もない死人として遺棄された羅生門の死人たちがろくな生き方をしていなかったことは明々白々のはずだ、と決めつけ、老婆は「そんなことをされてもいい人間ばかり」と言ったのである。応報的に「悪いこと」をしたから「悪いこと」をされてもいいという論理を確実に当てはめられるのは、老婆がその髪の毛を抜く女に対してだけである。たまたまその生前の詐欺行為をよく知っていた女一人の例をいきなり一般的に拡大して、こいつらはみんな悪いやつなんだ、と語る点に、老婆の自己弁明の強引さが表れている。さらに敷衍すると、老婆にとってみれば、「悪いこと」をしなければ生きていけない以上、この世に生きる人間は誰でも「悪いこと」をしているはずだということになろう。「悪いこと」をしなかった人間なら、老婆がその髪を抜くことはない、という話ではない。理屈にならないところまで理屈にしようという強引さは、理屈抜きに「悪いこと」を

せざるをえなかった老婆の生存の状況を逆に照らし出すものである。「口ごもりながら」無理な理屈を語る老婆は、理屈など立てている暇もなく、生きるためには死体の髪を抜かなければならない生の姿を語っている。

12わしが今、髪を抜いた女などはな　「干し魚」の読みは原典で「ほしうを」とルビがある。この挿話は「今昔物語集」巻三十一第三十一話「大刀帯陣売魚嫗語（ニウラウリンノコト）」によっている。「蛇（クチナハ）ハ食（クヒ）ツル人悪（アン）」とあり、食べると身体に毒になると考えられていたらしい。単なる商品詐称ではなく毒と知りつつ売ったことになる。そんな女の髪を抜いて、どこが悪いかという論理である。なお、女は、主典拠の「今昔物語集」巻二十九第十八話「羅城門登上層見死人盗人語（ノボリテニノカミニシニビトヌスムトヲミルコト）」では、老婆の女主人で、葬る者がないので、老婆が羅城門に置いたとされている。

13往んだわ。　「往ん」は、ナ変動詞「往ぬ」の連用形撥音便に、過去の助動詞「た」、確認の終助詞「わ」が付いた形。

15この女のしたことが悪いとは思うていぬ。　自己の行為を「なんぼう悪いことかもしれぬ」と言い切る老婆に、事の善悪ははっきり自覚されている。世間的な規範に従う常識的、道徳的な判断力は備えているのだ。だが、生身の人間は道徳のかいらいではない。老婆の口から語られる女の詐欺商売には、生きるための庶民の切実ないじましさがある。これは、荒廃した世に何とか生きる方途を得ようとする庶民の不逞なたくましさ、といっても同じだ。この切ないしたたかさは、ただエゴイズムといって済ますことのできない人間の相なのである。老婆の主張は、かつがつ生きるために選ばざるをえない行為に道徳的な善悪をあげつらっても無意味である、ということである。

16されば、今また、わしのしていたことも悪いこととは思わぬぞよ。　老婆の論理を単なる言い訳、さらには自己正当化の居直りと読むか、生き延びることの切実さから絞り出された声として聞くかで、評価は対極となる。「長い抜け毛を持ったなり」（P一九一・8）、「口ごもりながら」（P一九一・9）語る老婆の言葉は、生存のぎりぎりの場所から、「悪いこと」と知りつつなおそうせざるをえない者の「しかたがない」生を裏打ちするものである。

●一九二ページ

3おおかた……大目に見てくれるであろ。　「おおかた」は推量と呼応するときは、おそらく、多分の意。老婆の自我意識を示す。「大目に見る」は、寛大に扱う、の意。

4老婆は、大体こんな意味のことを言った。　老婆の会話の直前に「こんなことを言った。」（P一九一・9）とあるのに、また「言った」というのは重複だが、前後で応じることで段落の区切りをつける役割を果たす一行である。直接話法で会話を引いた後、「だいたいこんな意味」とあると、会話部分に省略があるとも取れる。書誌的には初出で間接話法であったものを直接話法に改稿した際、初出のまま残された箇所である。「こんな意味」は、老婆の論理展開を言う。「どうせただの者ではない」と下人から見られた老婆が、「ただの者」として口を利いたのである。ここに至って読者には、鳥獣の直喩で語られた老婆の気味悪さは消え、みすぼらしく弱々しい哀れな老婆の姿が、同じ鳥獣の直喩のもとで浮かび上がる。同時に羅生門のおどろおどろしい気配も消え、現実世界の舞台へと転換する。老婆の正体は尼僧ではないかという推測も可能だ。「檜皮色」は尼僧の衣の色であり、尼

僧であれば短い髪も説得力を持つ。さらに、接続詞を駆使した老婆の論理的弁明や、「現に」「菜料」など漢語の多用からも、漢籍を修得したことがうかがい知れる。

キー・ポイント　老婆の論理　形式的には、初めに〈悪には悪で報いてよい〉という〈応報の論理〉、次に〈生きるために「しかたがなく」する場合、悪は許される〉という〈生存の論理〉が語られる。前者の〈応報の論理〉は、直ちに〈善に対して悪は許されるのか〉という疑問を生み出す。しかもこれは後者の〈生存の論理〉と重ねて、〈生きるために「しかたがなく」する場合、善に対して悪は許されるのか〉という問いを必然的に導く。〈死んだ女が善人であったなら、老婆は髪を抜かなかったのか〉と具体化できる問いである。老婆はそこまで追究し原理化する理路を踏まず、眼前の具体的な状況に即して可能な理屈を投げたにすぎない。理屈が立つことはともかく言おうという稚拙さが、前後二つの論理を不整合にしている。その稚拙さは、これ以外にない生の選択の切実さと切実さゆえのしぶとさから出ているものだ。

だから、二つの論理を同等に見ることはできない。むしろ後者が老婆の依拠する唯一の論理だと言うべきであろう。生きることを第一義とする限り、生きるうえで「しかたがなく」なした行為の善悪を問うことは意味を持たない。老婆の論理はこれに尽きている。人間は誰でも生きている限りしかたなく悪に従う。誰もがしかたなく悪を生きる世界で、しかたがなく犯した悪をとがめられる人間などいない。自分は他人の悪を許し、他人は自分の悪を許すようにして人間は生きている。老婆の論理はこのような庶民の生活感情を代表するものである。〈生きることの前では、善悪に価値はない〉という論理、「仏像や仏具を打ち砕いて」「薪の料に売っていた」（P一八七・7～8、9）価値崩壊の時代の庶民の、惨めさとしぶとさが同居した、いわば〈生存の庶民的ニヒリズムの論理〉である。それを盗人猛々しい居直りと見て、自己正当化の詭弁と読むのは倫理的すぎる読み方である。また、世間智の偽善を嗅ぎ取り、唾棄するのも偏した見方である。人倫に背く死者の冒瀆という異常な行為も、無力な老婆の生きる場所から発する老婆の語りの中では、生きるための最小の悪、文字どおり「しかたがない」行為の一つとして捉えられている。

5冷然として、この話を聞いていた。　「冷やかな侮蔑」と「憎悪」を込めて老婆を突き放して見ている下人には、老婆の言葉に同情する余地はない。老婆の言葉は単なる言い訳として耳に入るだけである。

6大きなにきびを気にしながら　親身に老婆の話を聞く態度ではなく、関心が別の所にあって「冷然として」聞いている様子がよく出ている。

7ある勇気　以下「さっき門の下で、この男には欠けていた勇気」、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気とは、全然、反対な方向に動こうとする勇気」と言いかえられている。

8この男には欠けていた勇気　「『盗人になるよりほかにしかたがない。』ということを、積極的に肯定するだけの、勇気」（P一八五・8）を指す。「肯定する」とは単に論理上そうだと認めるのではなく、実行を決断することまで含んでいる。

9この老婆を捕らえたときの勇気　老婆の行為を「許すべからざる悪」と断定してこの老婆を取り押さえたときの勇気。つまり、〈悪を憎み懲らそうとする勇気〉。

9 全然、反対な方向に動こうとする勇気　盗人になることを積極的に肯定し、〈進んで悪を行おうとする勇気〉。「反対の方向」は〈善へ向かうか、悪へ向かうか〉の意味。したがって「門の下で、この男には欠けていた勇気」と重なり、「さっきこの門の上へ上がって、この老婆を捕らえたときの勇気」と反対の関係にある勇気である。

12 意識の外に追い出されていた。　考える余地すらない。生身の下人にとって、生きてゆくことは自明の前提である。「餓死」は最初から〈避けるべき事態〉として想定されていたにすぎない。なるほど、下人は手段を「選んでいれば、……飢え死にをするばかりである。」（P一八四・16）と迷っていた。だが、下人が「四、五日前に暇を出された。」（P一八四・3）後、路頭に迷ったあげく飢えと寒さに迫られ、「餓死」の危機を目前にしていたとするには、この下人には余裕がありすぎる。「一晩楽に寝られそうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かそう」（P一八六・2）というようなゆとりは、明日をも知れぬ危機的な限界状況にある男の思うことではない。激しくつかみかかり老婆を組み伏せる勢いもとても飢えにさいなまれる男のそれではない。「にきび」がその若さを明示する若い男にとって、「餓死」は現実と言うよりも措定された観念の問題にすぎない。この男は自殺を考えない。男には開拓すべき未来があり、生きることを自明の前提としているのだ。羅生門の下人にとって「餓死」は、このままでは立ち行かないぞという成り行きの先に観念されるものでしかないのだ。「餓死」が観念でしかないところで、生きるための行動を決意した男が「餓死」を念頭にすら置かなくなるのは、全く自然な成り行きである。つけ加えると、「餓死」については、楼上での「あらゆる悪に対する反感」（P一八八・15の場面で、「恐らく下人は、何の未練もなく、飢え死にを選んだことであろう。」（P一八九・2）と、「餓死」を選ぶ下人の心が語られていたことが指摘されるかもしれない。だが、これは、語り手が第三者に託して「誰かが……問題を、あらためて持ち出したら」（P一八八・16）と仮定した選択の問題であり、この場面で下人自身が「餓死」か「盗人」かなどと悠長に構えていたのではないことは明らかである。この場面の「餓死」は語り手の観念の中にしか存在しない。

14 嘲るような声　老婆の自己弁明の論理は、その形式的整合性で捉える限り、老婆自身への加害を肯定する諸刃の剣である。下人には生きるための悪が許され、老婆は自分が悪をなしている以上、自分に加えられる下人の悪を許さなければならない。下人の声には、老婆の論理が自分の行為の決断のために格好の口実となり、老婆自身の身に返ることになる愚かさへの、皮肉と悪意を込めた嘲笑の調子が込められる。

15 不意に右の手をにきびから離して　思考から行動への転換、決断して踏み出す姿。下人を束縛していた利き手がここで解放され、自由を獲得するきっかけとなっている。

15 老婆の襟髪をつかみながら、かみつくように　酷く非情に老婆を押しひしぐことで、ためらいや自己嫌悪を振り切り、荒々しく悪へ踏み切ろうとする姿である。「襟髪」は、首の後ろの髪。襟元、首の後方も言う。

●一九三ページ

1 俺もそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。　老婆の論理を逆手に取った下人の正当化の論理。自分の迷いを振り切り、生

きる手段の選択に当たって、最初から潜在的に志向されていた「盗人になる」道を自身に納得させ、合理化するための強弁である。下人は最初から実際に「餓死」に迫られた切実さを欠いている。そもそも、下人には道徳的な「悪」へのためらいがあったのだろうか、ただ「盗人になる」ことへのためらいがあっただけではないのか、という疑問が起こる科白である。

キー・ポイント　**老婆と下人の現実**　下人に最初「盗人になる」ことを肯定する勇気がなかったのは、道徳的に潔癖な心の持ち主であったからでも、「餓死」の危機を前に激しい心の葛藤を経て唯一の結論を得たからでもない。この若く力にも欠かない男は、前途に迷っている最中に頭をよぎった「盗人になる」道に手早くしがみついたのである。ほかに思いつかないから「盗人になる」ことを唯一の選択肢としたのである。ほかに方法がないからこれをするしかないという心の志向はあった。欠けていたのは大胆に踏み切る度胸である。それまで使用人として世間に暮らし、人並みに生きてきた男には、ためらいはごく自然な心の動きである。「悪」への不決断を、「善」との対比で、人並みの道徳感情以上にことさらに倫理的に意味づける必要はない。高邁な「道徳心」も切実な「餓死」も縁遠い下人に、善と悪の両極に引き裂かれた魂などは存在しない。必要なのは踏み切る契機である。老婆の言葉で初めて、「生きるためにしかたがない」行為が「悪」ではないと気づいたというのは、ほとんど冗談に等しい。すでに、生きるためには「悪」の行為もしかたがないと言葉にならない結論は得ていた。それに言葉が与えられ、男は踏み切ることができた。老婆の論理は行動へ踏み出すきっかけとして格好の口実を与えるものであった。

　老婆の現実は、髪の毛を握って離さない一事が示すように、仕様のない行為にしがみつく切実さを持っている。ことさらに老婆の不気味さを示すような動物の比喩は、実際にはその惨めな生をそのまま反映する。老婆の論理はその現実の表明であり、それがしぶとい居直りや自己正当化と見えるのは、現実の過酷さの中で必死に生に執着する庶民のしたたかさの結果にすぎない。老婆は蹴倒されても下人の「足にしがみつこうとする」ほど必死なのだ。これをエゴイズムと倫理的に断じても詮無い話である。

3 下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎ取った。

　「悪」へ踏み切るための象徴的行為。「盗み」が目的なら、老婆の持つ死人の髪や転がっている死体の着物まで奪ってもよいはずである。

5 夜の底　羅生門の楼上から下の深い闇へ視線を注ぐ表現で、奈落へ駆け下りる印象。次の「黒洞々たる夜」と共に人間の生の底知れぬ不可解さ、不確かさ、捉え難さを表象する。我欲に満ちた世界、一切の救済を断たれた無明の闇、無秩序ながら活気に満ちた自由な世界、主人公の悲惨な末路の暗示、この世の地獄を駆け抜ける悪の輝き等々、多様な見方を誘う含蓄がある。夏目漱石の「吾輩は猫である」の「声の底」などから学んだ表現方法だとも推察できる。また、川端康成も「雪国」で「夜の底」という表現を用いている。

10 黒洞々たる夜　暗黒の夜。作品の最後に一切を飲み込む深い闇の世界だけが残される。非日常である羅生門の内部から、白髪を逆さまにしてのぞき込む老婆の目には、日常である京の都が、一切の救済を断たれた地獄の暗黒世界として映っている。

11 下人の行方は、誰も知らない。　初出は、「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつつあった。」とあり、初版本では末尾が「急いでいた。」と変わり、さらに改稿されて現行の形となった。「行方」は、下人の以後の運命を含む表現。暗黒の世界に姿を消したまま、その運命は作品世界の向こうに投げ出されている。

キー・ポイント　末尾の表現　断絶と余韻の効果を生む象徴的な一文。まず、駆け下りた後の行方が不明で、作品世界の時間進行が断たれる。下人自身、自らの今後の行動を分かっているのか不明だ。次に、作品世界そのものの判断停止で、下人の人生という意味で、その後の運命が断たれている。語り手は、下人の視点と心理に重なりながら話を進めてきたこれまでの語りの形を捨てて、下人から身を離す。下人が語り手の及ばない世界に立ち去ったとも言えるし、語り手が下人を突き放したとも言える。同時に読み手もこの夜の闇の中で突き放される。幕が降りないまま劇が終わってしまった感じによって、読み手には、下人の行く末についてどんな想像も許されることになる。なお、典拠として「今昔物語集」巻二十九第一話「西市蔵入盗人語」の末尾「盗人ハ蔵ヨリ出テ、行ケリム方ヲ不知ズ」に拠ったかとも推定されている。

注意する語句

（＊で用例を示した）

一とおり…物事の状態が普通であるさま。尋常。
＊その辛さは一とおりではなかった。

足踏み…ある場所や家などに立ち入ること。
＊この場所には二度と足踏みをしない。

洗いざらし…衣服の、洗いすぎて色が褪せた様子。また、その衣服。
＊洗いざらしのシャツを着る。

途方に暮れる…どうしたらよいのか分からず、困り果てる。
＊財布をなくして途方に暮れた。

暇はない…余地やゆとりが全くない。
＊仕事がたまっているため、眠る暇はない。

あげく…（あることをした）末。いろいろやってみた結果。
＊どの店に入ろうか迷ったあげく、最初に見つけた店に決めた。

手段を選ぶ…あることを実現させるための方法を迷う。
＊手段を選ばない犯行。

片をつける…仕事やもめごとなどの始末をつける。決着をつける。
＊借金まみれの生活に片をつけて新しい商売を始める。

息を殺す…息もしないでじっとしている。
＊ライオンが息を殺して獲物の様子をうかがっている。

高をくくる…大したことはないと見くびる。侮る。
＊それほど難しい問題ではないと高をくくっていたが、大きな間違いだった。

語弊がある…言い方が適切でないために起こる弊害。
＊駄作だと言うと語弊があるが、魅力に乏しい作品であることは間違いない。

とうに…早くに。ずっと前に。とっくに。
＊パーティーの準備はとうにできていた。

わなわな…恐怖や怒り、寒さなどで身体が震えるさま。
＊彼女は怒りのあまりわなわなと震え出した。

冷ややか…態度が冷淡なさま。
＊冷ややかな視線を向ける。

口ごもる…返答に窮すなどして、言うのをためらうさま。また途中でいうのをやめるさま。
＊その問いに彼は思わず口ごもった。

現に…目の前に。現実に。実際に。
＊目撃者が現にここにいるのだから、うそをついても無駄だ。

大目に見る…緩やかに扱って、とがめない。寛大に扱う。
＊子供なので、失敗しても大目に見てもらえる。

嘲る…馬鹿にして笑う。悪口を言う。
＊人の失敗を嘲るようなことをしてはいけない。

念を押す…重ねて確かめ注意する。
＊集合時間を守るよう念を押したのに、やはり彼は遅刻した。